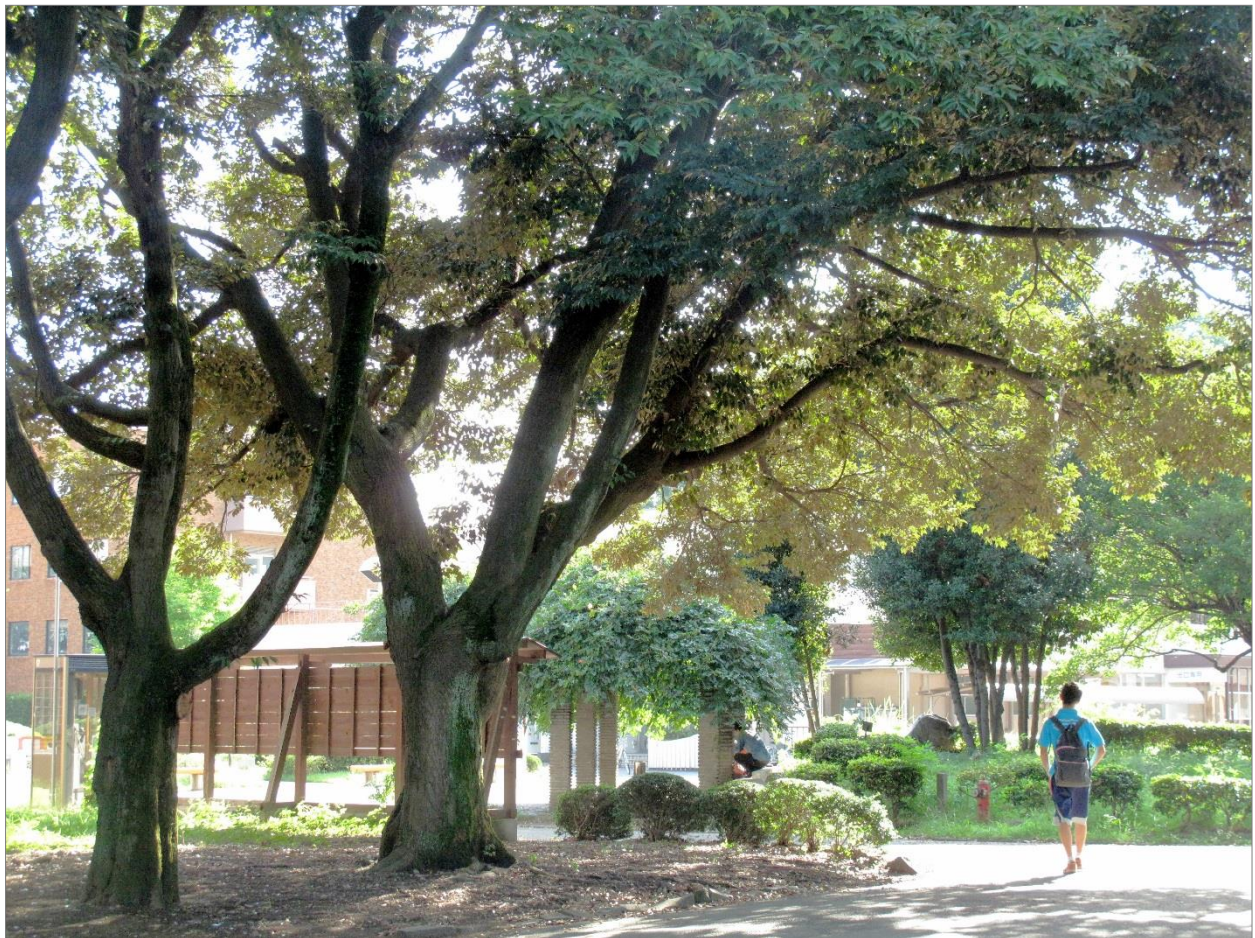




Let's Green & Clean
一橋植樹会

一橋植樹会の歩み



植樹会の歩み

一橋植樹会史の初版が2010年8月に発行され、4年半を経てこの度改訂版を発行する運びとなりました。昨年は植樹会創設から40年、新しい活動を始めた新生植樹会から10年と言う極めて記念すべき年となり、記念式典を行いました。大学からは植樹会の貢献に対し感謝状を頂きました。



温故知新という言葉があります。歴史を学ぶことにより現在の自分の立ち位置を知り、今そしてこれからどうあるべきかを考えることです。

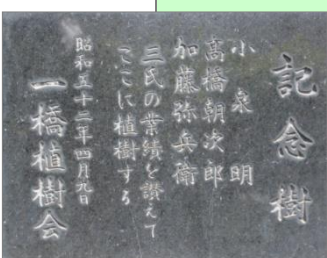
植樹会は40年と短い歴史ですが、立ち返って植樹会組織の創設の意味やそれに関わった先輩の意思を知り、理解することは、植樹会が現在及び将来どのような活動をして行くのか考える極めて大事なことだと思っています。又、「歩み」を更新して行くことでその精神を次の世代に引継いで行くのに大いに役立つものと考えています。大学が国立に移転して来年は85年になります。今から10年前に大学が「緑地基本計画」を作成し、それに基づき植樹会はキャンパスの緑の維持管理をサポートして来ました。この基本計画のレビューを2年に亘り行った結果、これまでのような維持管理では十分でないことが判明しています。元々武蔵野の雑木林を切開いて造られたキャンパスです。今残っている木々の多くはすでに高齢に達しています。近年枯れ損木や衰弱木が多く見られるようになりました。すでに世代交代の時期が来ていることは間違いありません。これらの老木をどのようにして若木で補植して行くのか極めて大きな課題です。木を植え代えることに注力することが今求められています。昨年から開始した雑木林の復元プロジェクトを粘り強く継続して行くことです。

一方では多くの松枯れも発生しています。50年前、私の卒業時の学長であった故増田四郎先生が松枯れを嘆かれた時の状況と全く同じです。先生は毎日キャンパスを散歩され一木一草に心を寄せられ、当時の松枯れに心を痛めておられたと言われていました。『校内の赤松にも徹底的な若返り策を施し、更に百年、二百年の後まで、変わらぬ松の緑を保たせたい。切り倒した後には直ちに松の若木を植え一橋大学の構内だけは、いつまでも緑の森であるようにしたい』。この思いに強く共感するものです。当時に比べれば松の木の本数も大幅に減っており、このままでは松の絶滅も心配されます。赤松も“一橋の歌—武蔵野深き松風に”の歌詞に残るだけになってしまうのでしょうか？コナラやクヌギ等雑木林の木々も同様です。今こそ将来を見据えたキャンパスの緑のプランが必要だと思います。大学と共に計画のレビューをしっかり評価し、施策を策定し実行して行きたいと考えています。

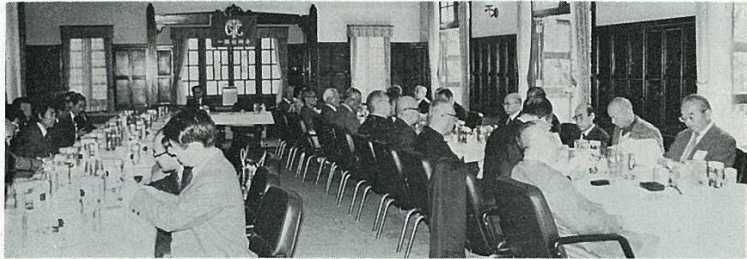
平成26年4月

一橋植樹会会長 八藤 南洋(昭40経)

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
1967	昭 42	増田学長の植樹運動提唱 「昭和40年代初め、国立キャンパスにある松が異常に多く枯れてゆくのに気づき、何とかこれを食い止めたいと、如水会報に拙文を載せたところ、花いっぱい運動にご熱心であった加藤彌兵衛さんなど多くの会員から関心を寄せられ、母校への植樹運動が盛り上がりしてきた」(如水会々報) 「増田先生は、毎日学内を散策、国立の一木一草の思いを込めてご覧になっておられた。学園紛争当時、先生は一木一草に深い何かがあることに思いをいたし母校の環境を憂える気持ちでご覧になっておられたのであろう」(後年の阿部学長の植樹会総会時挨拶に) 総会で挨拶をされる増田四郎副会長		ASEAN 結成
				EC 発足
1968	昭 43		学生自治確認書取り交わし	伊藤整氏(昭6学)芸術院会員となる
1969	昭 44		大学紛争	文化庁設置 大学紛争
1970 1971	昭 45 昭 46		千代田区に「一ツ橋」の町名維持の努力が結実	アポロ宇宙船月面着陸 大阪万博、三島由紀夫自殺 沖縄返還協定締結 ドルショック

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
1972	昭 47 8 月	世話人会が開催された。主だった世話人の方々は増田四郎、加藤彌兵衛、石川善次郎、横田毅一郎各氏	一橋寮竣工	札幌冬季五輪 日中国交回復
1973	昭 48 10 月	26 日創立総会開催 初代会長に本田弘敏氏(大10本)就任	学部入学生数 722 名	金大中事件
植 樹 会 の 目 的 と 事 業 「一橋植樹会は一橋大学のキャンパスの緑化推進、環境整備に必要な援助をすることを目的とする。 「必要な援助」は財政的援助、樹木や草花などを寄付する物的援助ないし労力奉仕などを含む」 (定款から) 同時に、創立総会以降に繰り返し説明されてきた「理念」がこのとき表明されている。 1、学園キャンパスの荒廃に立ち向かうの精神 2、環境整備の一助となる 3、「母校に緑と花」運動に力をいれ会員を増やす 本田弘敏初代会長の挨拶から 「美しい自然の赤松に囲まれた国立の緑深い環境は教育の場として本当にすばらしいものでした。ところがその後、樹齢のためか、大気汚染のためか松の立ち枯れが目立つに至り、時の増田学長はその対策に腐心、大学の環境保持に努められたのに呼応して、先年来加藤彌兵衛大先輩方が率先「植樹」運動を起こされてきたのであります。今回この運動を組織化することになり『一橋植樹会』が強力に発足することになり……」「……大学百年の大計のため極めて有意義な事業であり……」				
1974	昭 49 4 月 10 月	観桜会開催 植樹会;初年度1年で寄付・会費184万円に上った		
ヒマラヤ杉の植樹(1975 年)				
1975	昭 50 4 月	第2回総会での報告から、「NY 支部寄付により金木犀を植樹」	一橋大学 100 周年記念式典	ベトナム戦争終結
1976	昭 51 4 月	第3回総会時に観桜会実施	同 100 周年記念事業スタート	ロッキード事件、毛沢東死去
1977	昭 52 4 月	第4回総会開催時に一橋百年記念・渋沢栄一翁生家訪問・植樹祭・端艇部激励会・寮歌祭合同の懇親会開催 「海外支部の寄付によりカツキ、ツゲを植樹」	授業料 96 千円/年となる	日航機ハイジャック事件
植樹記念碑 				
1978	昭 53 4 月	第5回総会開催、本田会長の挨拶から 「会員の皆様の熱心な後援により、母校一橋大学キャンパスの植樹および環境整備のために寄せられた会費および寄付金は、累計600万円余になります。一方、これによる事業のほうも着々と進みまして、……学園紛争のころの荒廃したキャンパスの状況と比べれば、全く今昔の感があるといつてよい位、美しく整備されてまいりました。 古来、『明媚なる山水は偉人を生む』と申しますが、私は、このような環境整備に伴って、一橋大学が邦家のために有為なる人材を生むであろうことを、大いに期待する次第です。私は、本会の事業が草創期を経て、今や成長期に入ったと考えております」		日中平和友好条約調印 大平首相就任 植村直巳犬ぞりで北極点到達 1ドル 200 円を切る
1979	昭 54 4 月	第6回総会開催	共通一次試験スタート	ソ連アフガン侵攻 サッチャー政権誕生

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
1980	昭 55 4 月	第7回総会記録に『大学キャンパス総合環境整備計画』後援の件を満場一致で可決 同報告事項中から 「思索の森」の造園(太田可夫教授ゆかり)、「アメリカハナミズキ」植樹(水上達三氏寄贈)、百周年記念碑の設置	図書館新館竣工	海外旅行本格化 イラン・イラク戦争
1981	昭 56 4 月	第8回総会開催  総会後の記念撮影	授業料 18 万円/年となる	中国残留孤児初来日 田中康夫氏「なんとなくクリスタル」で「文芸賞」受賞 中教審「生涯教育について」答申 気象衛星「ひまわり2号」打ち上げ成功
1982	昭 57 2 月	増田学長の言葉「初代会長本田氏を偲んで」から 「本田さんは、この運動の純粋さに賛同され、いつも「こんな気持ちのよい会はない」といって、終生この運動の推進に尽されたのである。そして毎年春4月に、花見をかねておこなう国立での植樹会総会には、どんなに忙しくとも必ず出席され、樹木の整ってきた小平と国立のキャンパスを見てまわり・・・」	国立天安市、一橋祭共催スタート	フォークランド紛争
	4 月	第9回総会開催、会長に竹村吉右衛門氏(大13学)就任  宮澤学長、竹村新会長、増田副会長、水上達三の各氏	新如水会館竣工	中曽根政権誕生 歴史教科書問題が発生 国際捕鯨委員会で、商業捕鯨の全面禁止を決定。
1983	昭 58 4 月	第10回総会開催、竹村吉右衛門会長の挨拶から 「樹木というものはなかなか成長しないように見えながら、案外に早いもので、校内の木々もここ数年の間に目に見えるように成長し、戦後の荒廃、学園紛争時代の有様を知る我々にとりましては、まさに今昔の感があります。 ―中略― 問題は、今後これをどういう風に保守していくかであります。環境整備ということは、建設することよりも保守する事が大切で、今後ともこの点につきまして学校当局ともよく相談し、武蔵野の一角にわずかに残りましたこの美しいキャンパスの環境整備に努めたいと存じます」 総会報告から、「植樹会創立(昭48)から57年度末までの大学への寄付額は累計で985万円となる」	森社会工学会奨励金発足	「おしん」視聴率65% 三宅島噴火
1984	昭 59 4 月	第11回総会開催、報告から 「学校当局から 記念植樹に際しては造園計画、あるいは維持管理の点から事前協議の要望をいただいた」	一橋大学公開講座第一回開催	グリコ・森永事件 多摩川にサケ戻る
1985	昭 60 4 月	第12回総会開催、会長に水上達三氏(昭3学)就任	大学で室田助教授(当時)を中心に学内緑化運動	日航機御巣鷹の尾根に墜落

西暦		植樹会関連トピックス	学内トピックス	学外トピックス
		総会議題、3号議案に関して出席者の発言から 「基本問題というのは、最近の植樹会の寄付金の通減傾向を憂える所から、この運動の基本的あり方を根本的に考えていただきたいという主旨のもので、将来計画を常務理事会に付託して立案していただきたい」  総会の様子	都留重人名誉教授ハーバード大学から名誉博士号授与	NTT、JT 民営化決定
1986	昭 61 4 月	第 13 回総会開催 年度報告の中に「東校舎本館の正面玄関付近ほか整備した」とある。 なおこの年、国費による環境整備費は 18 百万円余で松のコモ巻きほか、東校舎体育館・部室周辺、フェンス沿い及び佐野書院等の環境整備しました、との記録あり(如水会々報)	一橋フォーラム21 開講	チェルノブイリ原発事故 前川レポート
1987	昭 62 4 月	第 14 回総会開催	如水会大学海外派遣留学制度創設	JR 発足
1988	昭 63 4 月	第 15 回総会開催、川井学長の挨拶から 「外国から見えた方々も一様に一橋大学の美しさを賞賛されるが、これもひとえに植樹会が母校の環境美化に尽力されているお蔭と感謝しつつ、こうした支援に報いるためにも大学は研究面からの内容充実に努めてゆきたい」 年度報告の中に「矢野先生銅像周辺整備(樹木剪定、敷石取設)」とある。	一橋論叢第 100 巻刊行	大学審議会設置法案可決
1989	平 1 4 月	第 16 回総会開催		青函トンネル開通
1990	平 2 4 月	第 17 回総会開催、会長に植松健悟氏(昭 14 学)就任		消費税導入
1991	平 3 4 月	第 18 回総会での報告から「産業経営研究所の西南側環境整備(植栽および遊歩道設置)に注力した」		天安門事件、ベルリンの壁崩壊
				バブル崩壊 長期不況へ
				湾岸戦争勃発
				ソ連邦崩壊

80年代と90年代の一橋植樹会

白石 武夫(昭 35 法)

私が如水会事務局の総務部長、業務部長として、植樹会の運営にかかわっていたのは1983年4月から2002年4月までのほぼ20年、タイトルの時代区分、その流れの「時」と一致する。

この時期の植樹会の活動状況はあえて一言で言い表せば「マンネリ化」であったといえる。つまり、草創期のあの熱が冷めたかのように年1回の定例総会のみが年中行事と化し、十年一日のごとき筋書きで会が運営されていた。

当時 監事で、植樹会運動に大変熱心であった故中村達夫氏(昭16学後)が、「マンネリに堕した本会をどうするのか、どういう方向に持っていくのか」といったことを総会の場で発言しておられたことを思い出す。

マンネリ化の状況を指し示す具体例を思い出すままにいくつか挙げてみる。

- ①総会の題が「植樹会と観桜会」となっており、「お花見がてら総会にどうぞ」といったニュアンスであった。
- ②総会出席者の顔ぶれは、林鷹治大先輩(大 12 学)、一番下が昭和45年卒の田中襄一、樋浦憲次の両君といった具合でほぼ常連化していた。
- ③78年(昭和53年)の第5回総会までは、毎年会費収入も百万円を超え、母校にほぼ同額を寄付してきたが、第6回あたりからその額も減少傾向になってきた。そのため相応の寄付を維持すべく、87年の第14回総会から、毎年如水会から30万円の補助をうけるようになった。

このような中で、私はある会合で、当時植樹会副会長であった増田四郎先生(昭7学、元学長)に「一定の役割を終えた植樹会は解散したらどうでしょうか。」と話を切り出したことがあった。すると先生は「白石君、植樹会はいかにも一橋らしい精神運動なんだよ」と爽やかな笑顔で答えられた。それ以来私は、先生のお言葉の哲学的含意を考え続けてきた。(了)



桜咲く小平分校の階段教室などを見学

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
1992	平 4 4 月	第 19 回総会開催、塩野谷学長の挨拶から 「母校キャンパスはお陰様で日本国内では相対的には良好である、しかし、今後は環境の維持・管理が植樹以上に大事になる。植樹した樹木の全体の調和を維持し管理していくことがこれまで以上に大切である。…本来ここ国立キャンパスは松風の吹くところであった」	国際交流会館完成	銀行不良債権問題激化
1993	平 5 4 月	第 20 回総会での報告から 「平成5年度 第一新館南側環境整備に注力した」	38機関との間で国際交流協定締結	Jリーグ開幕 細川内閣成立
1994	平 6 4 月	第 21 回総会開催、その議事録から 「故茂木啓三郎理事の追悼に当たっては、『募金というものは集まった金額の多寡ではなく、寄付に参画されたかたがたの人数が大切だ』と生前おっしゃっておられた」 会員有志は佐野書院 改築現場を見学		
1995	平 7 4 月	第 22 回総会開催	佐野書院改築完成 留学生総数 300 名を超す	阪神大震災 公定歩合を史上最低の 0.5%に引き下げ
1996	平 8 4 月	第 23 回総会での報告から 「昨年度東キャンパス合同棟周囲環境整備に注力した」	小平キャンパスの改革・国立へ統合・移転	
1997	平 9 4 月	第 24 回総会開催、植松会長の挨拶から 「東校舎周辺の緑化と小平跡地の環境整備に取り組む」	東キャンパス講義棟 2 号館完成	京都議定書 香港の中国返還 山一証券自主廃業
1998	平 10 4 月	第 25 回総会後の懇談の場で 「国の予算で計上している大学の緑地整備費3千万円と対比してその5%にも達しない植樹会の寄付金のあり方に改めて疑問を提起、現時点の 5 倍を目標にした方策を講ずるべし」との提案があった。	大学の付属図書館がランキン グ 1 位に評価さる(朝日新聞)	イラク空爆
1999	平 11 2 月 4 月	石学長論文「キャンパスは大学の顔」を「国立学報」に寄稿 第 26 回総会開催、石学長の挨拶から 「ゴミは自分の顔に泥を塗りたいようなものだ。キャンパス内に散乱するゴミはまさに大学の顔を汚し、いくら研究・教育面で名声をあげても良い大学だとは胸をはって人前で誇れない。……学内がきれいになったといわれるよう努めたい」	 石 弘光学長	石原都知事誕生
2000	平 12 4 月	第 27 回総会での報告から 「東キャンパス校舎棟の南側環境整備に注力した」	大学院重点化完了 入学生総数 1042 名	沖縄サミット
2001	平 13 4 月	レバノン杉 小平キャンパスに植樹 第 28 回総会での植松会長の挨拶から 「本植樹会としては引き続き「東校舎周辺の緑化」が一段落したので、小平地区の緑化にも力を入れてまいりたい」	四大学連合憲章締結	9. 11テロ
2002	平 14 4 月	第 29 回総会開催、総会後の観桜会には国立市「桜守の会」 大谷氏、動物写真家 大高氏が特別参加	小平国際共同センター新設	食品偽装事件多発 通貨ユーロ統合 日韓共催 FIFA Wカップ開催

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
2003	平 15 4 月	第 30 回総会の場での片柳梁太郎常務理事(植松会長の代理)の言葉から 「昨今、大学当局の緑化整備の努力にもかかわらず樹木や芝生の管理に手が回らず、『汚い危ない負の環境』になりかねない一面も出ているが、緑の環境保全には『不断のきめ細かい手入れ』が必要である」 植樹会から石学長に改革・提言の申し入れ	大学法人法成立、改革始まる 兼松講堂大改修 総合情報処理センター設置	SARS の脅威 イラク戦争
	6 月 7 月	緑地管理のため調査開始 現行形式のボランティア作業開始 参加者 10 数名 植樹会ホームページ立ち上げ	COE プログラム 3 件採択	
	12 月	「国立キャンパス緑地基本計画」骨格固まる 如水会事務局との連携密接化		
2004	平 16 4 月	第 31 回総会開催、会長に岸田登氏(昭 35 経)就任 定款を大幅に改訂(要旨) 1、会の目的変更 (苗木を植える植樹会から緑の環境保全を支援する植樹会へ) 2、大学当局を中心に OB と学生の連携強化(学生会員の新設) 3、円滑な会の運営(常務理事、常務理事会の廃止) 総会後に如水会からの言葉 「月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業を既に開始していると聞いております。今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、との新しいコミュニケーションの場が実現し、みなで作り上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することを期待しております」 「国立 100 年の森」プロジェクト スタート 顧問に福嶋司東京農工大学教授就任	国立大学法人一橋大学発足 法科大学院開設 北京事務所開設	チェチェン独立闘争 スマトラ沖大地震 日本の「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録 アテネ五輪
	11 月 12 月	福嶋顧問 如水会館定例晚餐会で「基本計画と理念・保全」について講演 基本計画策定後初の植樹実施	「国立キャンパス緑地基本計画」が承認された	

《遺稿》

植樹会活動に対する想い -小冊子掲載文からの抜粋-

植樹会元会長 岸田 登(昭 35 経)

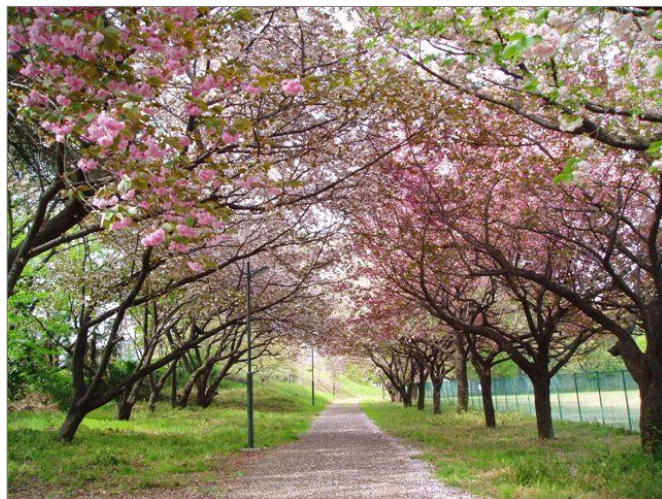
大学の緑は教育環境に様々な恵みを与えてくれる。一つは「防音効果」。元々キャンパス周辺は静かであるが、森があることによって更に静かになる。二つ目が「温度調節」。三つ目は「酸素供給」。四つ目は「フィトンチッド(木の精)」を放出する。更に、緑は眼や心の疲れを癒してくれる等、様々な恩恵を与えてくれる。この様に大学の先生方、学生の皆さんは無意識の中に非常に恵まれた環境で、研究・勉学されているといえることができる。

今大学の森は手入れ不足で荒れている。この貴重な財産を後世に引き継いで行こうというのが植樹会の「思い」である。幸い大学当局も思いは同じで、大学緑地全体に関して、『国立キャンパス緑地基本計画』を作成し、緑化維持の計画性、持続性を図ることになった。

先ず、如水会員には更に「母校の緑」に関心を持って頂き、大学当局の方針を充分踏まえながら、出来ることから取り組んで行く方針である。具体的には従来の活動に加え、大学が作成した「国立キャンパス緑地基本計画」に基づき、月一回の緑化維持、環境美化保全の現場作業をボランティア活動として開始した。

今後はこの活動に学生諸君にも参加して貰い、教職員、OB、学生との新たなコミュニケーションの場が実現し、共同作業を通じて一体感が醸成出来ると期待している。また皆で作上げた美しい緑の環境で、感受性豊かな人材を輩出することが植樹会の遠大な目標でもある。

樹木は我々人間よりずっと長生きする。母校の森も例外ではなく、この森を世話していくためにも、植樹会を通して先輩から後輩にこの「思い」を伝えて、持続的に行動することは大きな意義があると思う。大学法人化を契機に教職員、OB、学生が一丸となって大学の緑を守っていくことが「自然保護」、「教育環境保全」に繋がるものと考えます。(了)



春の「岸田」ロード

岸田元会長は植樹会会長に就任直後に急逝されました。本文は「植樹会小冊子(2004 年 12 月発行)」に掲載されたものです。

2003 年 4 月 5 日に開催された第 30 回総会で、一橋植樹会は大きく活動方針を転換しました。この転換期に活躍をされた方の中から福嶋司氏(当時東京農工大学教授)、田崎宣義氏(当時社会学研究科長兼社会学部長)、田中政彦氏(当時植樹会常務理事)に当時から振り返って頂きました。(司会は植樹会佐藤征男氏)

司会：田中さんは故岸田登元会長とともに 2003 年 4 月 22 日、母校に石学長（当時）を訪ねられ、緑の環境改善を促す提言をされたと聞いています。



田中顧問

田中：大学の緑を「よくここまで放っておいたものだ」というのが、当時の率直な思いです。当時、相当たくさん木を植えて、キャンパスを緑豊かにしようという意図は、至る所に見えていました。しかし手がつけられなくなった部分があったんだろうと思います。植樹会の方にしても「植樹会の歴史的使命はもう終わった」という意見もありました。然し、折角OBも熱い気持ちを持っているわけだからと、岸田氏と一緒に緑の管理の必要性を申し入れたら、快く大学に受けとめて貰いました。「それなら一緒にお手伝いしよう」という気持ちが盛り上がりました。当時の会員数は 150 人位で、いってみれば苗木を寄付する人たちの集団、大学の教職員の皆さんや学生は含まれていませんでした。

田崎：大学では緑は大事だという認識があり、「一本たりとも切るべからず」という風潮でした。1999 年 1 月に図書館の拡張工事で大きいヒマラヤスギを伐採しましたが、そこに辿り着くまで学内の議論が大変でした。石学長と安藤図書館長が木の前でお別れの言葉を述べ、2 本の木にお神酒をあげてそれでやっと切るという状態。こんなことでは建物も建てられない。遷移も進む。このままではまずいな、というのが最初の出発点です。お話に出た 2003 年の 4 月 22 日、石先生に呼ばれて学長室に行ったら、田中さんと岸田さんが居られて、そこで「木の手入れをするから頼むぞ」という話になったんですね。そこからです。植樹会が変わって行った事が大学を変える力になったと思います。そしてその頃、知り合いになっていた福嶋先生にお知恵を借りることになりました。

司会：福嶋先生、最初にキャンパスをご覧になって驚かされましたか。

福嶋：いや吃驚しました。

司会：キャンパスの調査もされたんですね？

田崎：そうです。記憶では同年の 6, 7, 8, 11 月と 4 回位、全部キャンパスを周って。

田中：福嶋先生は、これは皆が見て、皆の気持ちで決めなきゃならないことだから、よく見て勉強して判断して下さいという事でした。



田崎教授

司会：そうした植樹会と大学が連携する流れの中で、大学は「国立キャンパス緑地基本計画」を 2004 年 12 月に決定しましたね。

田崎：福嶋先生に田中さんや施設課の皆さんも一緒になって作って下さったのを大学の正式の方針として決めました。そのずっと以前、2001 年 11 月に福嶋先生にキャンパスを見て頂いた。その時に、「これはゾーニングをして、計画的に管理して行った方がいいですよ、必要であれば私がお手伝いしてもいい」と言って下さったのを覚えています。

福嶋：私は本当にお手伝いをしただけですから。

田崎：普通、建物の基本計画はどの大学にもあると思いますが、緑地の基本計画を持ったのは、国立大学では多分うちが初めてだと思います。

福嶋：初めてでしょうね。うち（農工大）にもないんですよ。

田中：私が言うのも何ですが、実際は 2003 年 6 月に福嶋先生の頭の中には基本計画はもう全部入っていたんです。



福嶋顧問

福嶋：限られた空間ですけども、武蔵野の自然も残っているし、人の生活する場所でもあるし、植生管理という私の専門部分の「人間との関係」、「自然との関係」のあり方を勉強するのに非常にいいフィールドだという感じはありました。

司会：その後、その基本計画に則って作業を進めてこられましたが、最初参加者はどうでしたか。

田中：2003 年 7 月から調査と平行してボランティア作業をやったんですけど、少なかったです。10 人強位ですかね。

司会：植樹会の学生、教職員、OBと三者での全学運動という意識は最初からですか？

田崎：2003 年 11 月位が最初だったと思います。社会学部の会議室で集まりましたっけ。

福嶋：野鳥などに詳しい中野晶子さんなどの学生もその段階から関与していました。

田中：本来は、学ぶ学生達と、仕事をしたり研究をしている先生方と職員が守っていくものですね。故岸田会長の考え方ですが、学生もただ享受するだけではなく、緑に参画していく。

司会：そういった理念といえるものは意識として浸透してきたと言えますか。

田中：強くそう思います。それはやはり福嶋先生の指導を受けてやっていくでしょう。そうすると、綺麗になって来るから自信がついてくる、それは老いも若きも僕は一緒だろうと思います。

司会：こういったことは日本の他の大学であまりありませんね。

田崎：ないと思います。聞いたことがない。私どもは誇るべき活動を持っていると思います。またゼロ・エミッションとゾーニングとボランティアの三つは福嶋先生の始めからのアイディアです。これがまた素晴らしいですね。

福嶋：基本計画策定の時に皆で議論していたら、やはり捨てるものはないと。枯れた木でも置いておけば別の昆虫だって生活できるし、それをまた食べると鳥もいるし、外に資源を出して捨ててしまうよりは、中とでとにかく回すような恰好の方がいいじゃないかという話になったんですね。その時の基本計画の幾つかのキーワードの一つが、今述べたゼロエミッション。

田中：「基本計画」を作る前の調査時にキャンパスを周りました。それこそ竹藪などをかき分け、かき分け。全部綺麗にするというイメージもあったのですが、「そのままの形で残すところもあるんだ」という事をものすごく新鮮に受け取りました。ゾーニングの重要性を納得しました。

福嶋：ゾーニングする上でのポイントは、人間が一番たくさん出入りして使う所と、そうでもない所。求める機能も違うわけです。一番人が使う所は憩いの場所であるし、リラックスできるような中心部。その全く逆が周辺部です。周辺部は外とのある意味、隔離の部分、防音とか砂ぼこりを外に出さないという機能もある。同時に手を余り入れないという所で、野生の動物、特に竹藪にはウグイスなんかが生息しています。両方の中間部分というのは、桜を多く植えてある部分や武蔵野雑木林の流れを残している部分で人間が使い、自然の力にも任せるといふ、その両方の感覚。

司会：緑地基本計画の中には、都市緑地における緑の考え方もありますが、教育研究というキャンパス機能のあり方もあると思います。

田崎：80年以上前大学が国立に移ってきた時、「自然環境に恵まれた中で教育し、研究することが、大学にとって一番いい」という考え方があった。それをこれからも維持したいというのが当時の一番の考え方でした。ヨーロッパの僕が訪問した大学では、キャンパスの緑を管理するセクションがちゃんとありました。ところが日本の大学でそういうものを持っているところはどこにもない。大学としてこの緑を大事にしていくことが大切です。またキャンパスの緑は多摩地区の中でも貴重な緑です。それをこれからも維持して大事にしていくというのは、地域社会にとっても大事なことだと思います。

司会：では、今後の活動について考え方をお示し下さい。

田崎：基本計画は大学が機関として決定したものですから、それを活かすことが第一です。また、ただ墨守するのではなくて、必要があれば見直す。それからもう一つは、キャンパスの緑を通して教養が場ができるというと思います。

福嶋：作業を7年間やってきて、第1段階は終わったかなという感じはします。それは基本計画に沿って作業した成果が出ていていると思いますが、第2段階となると、「伐採した所」「木がない所」に今後どういう緑をつくっていくかということです。東キャンパスを中心に、もう少し緑の進展があってもいいという感じはしています。それぞれの場所で管理の仕方を考えていかなければいけません。それぞれの場所のカルテを見て、それがどこまで達成できているのか、できていないのか。チェックをやっていくことが必要だと。



ボランティア活動の様子

もう一つは、教育にこの自然をどう生かしていくのか？この必要性は非常にあると思います。作業だけでいいのか、あるいはカリキュラムの中にそういうものを組み込んで、実際に接するようなフィールドワークをやっていくのか。外からわざわざ講師を招かなくてもOBの方が直接話をするという形があってもいいでしょう。やり方に関していろいろなアプローチができるんじゃないか。イベントとして、遊び心も持ちながら進めることもいい。ススキの草原をつくったなんていうのは月夜の十五夜を見ようかというのがその例です。先はちゃんと見据えていれば、いろいろなことがあってもいいなと。そんな感じがします。

司会：2003年以降ずっと活動してこられた田中さん、今の段階はどこまで来たとお考えですか。

田中：さっき、福嶋先生が第1期が終わったという表現をされましたし、田崎先生も熱き思いがまだ全部実現したわけではないというし、そういった意味では当時を思い出すと非常に大変なエネルギーを私は自分で使ったと今でも思っています。それでもいろいろな視点から見てまだまだやることはたくさんあるという思いです。ですからぜひこれからも植樹会の皆さんには活躍していただきたい、頑張ってもらいたいということです。（了）

（2010年4月如水会館にて）

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
2005	平 17 4 月 7 月	第 32 回総会開催、会長代行に田中政彦氏(昭 35 経)就任 キャンパス外研修スタート、初回は群馬県玉原高原(ブナ林)見学 “一橋大学クリーンキャンパス キャンペーン”応援参加	「記念植樹一覧」表完成 緑のデザイン賞受賞	福知山線脱線事故 ロンドン同時多発テロ 郵政民営化選挙
2006	平 18 4 月 5 月	第 33 回総会開催、会長に加納誠三氏(昭 37 経)就任 学生会員からも植樹会理事誕生 レスター・ブラウン博士(アースホリゾン研究所長、一橋大学名誉博士) 特別会員となる 一橋祭・KODAIRA 祭に植樹会として参加、以後毎年継続参加	「大学植生リスト」完成 第一回ホームカミングデー開催	ライブドア、村上ファンド事件
2007	平 19 4 月 9 月	卒業生記念植樹再開 (3 月) 第 34 回総会開催 他大学キャンパスめぐりスタート、初回は玉川大学	記念植樹	年金問題発生
2008	平 20 4 月 9 月 10 月 11 月	第 35 回総会での報告から「年間のボランティア作業参加者数 933 名を数える。」 他大学キャンパスめぐり 東大駒場キャンパス見学 キャンパス外研修 千葉県亀山で三井物産フォレストと合同研修 キャンパス外研修 玉原高原ブナ林作業	一橋大学基金の募金スタート	世界的金融危機発生 北京オリンピック 中国四川省で大地震

気持ちは一つ 多様な活動

植樹会副会長 佐藤征男(昭42経)

キャンパスの一角での雑草抜きや刈り込み、樹木伐採などに汗を流しました。母校は緑豊かに美しくあってほしい。作業に取り組むOB、学生、教職員の気持ちは一つです。大人数にもかかわらず、見事なチームワークで作業が進められました。1 時間半ほどで見違えるほどに整備されました。「いいなー、ずいぶんきれいになった」と先輩OBの声が上がりました。『如水会々報』の「植樹会通信」の作業報告で「作業前」と「作業後」の写真を載せると「いいねー」と反応が寄せられます。荒れたキャンパスの一角が作業後は見違えるようにすっきりしているからです。

自ら作業を行う植樹会へと方針を転換して 10 年。日に日にキャンパスに清潔感が漂い、緑の輝きが増しています。このキャンパスで学べたことに喜びを感じます。一人でも多くのOBが母校で汗を流して欲しいと思うのは、この快感を共有したいからです。

植樹会活動のメインは定例の作業です。「緑の基本計画」に則りながらも、作業活動は多様です。OBは毎回50名前後が参加しています。最近では学生の参加も多く、作業活動もパワーアップしました。樹木の世代交代を図るため植樹、移植も実施しています。運動部と共催して、ラグビー場やホッケー場周辺の草刈りなどの臨時作業も行っています。学外から多くの人々が訪れるKODA祭や一橋祭前には学生との整備作業を欠かしません。学生達は花壇を西カフェテリア近くの広場に造り、自主的に管理をしています。

定例作業が終わると毎回、学生とOBとの交流会が開かれます。交流会に初めて出た新入生は「世間ではおじいちゃんと呼ばれるような OB の方々の人数に驚かされた」といいます。それでも「歓談の時間が終わる頃には、参加の心境が一変、認識が変わった。植樹会を通じて、僕は様々な人と親しくなることができた」と記しています。

初めて参加したOBは「心地よい汗をかいた頃、作業は終了し交流会へと続きます。交流会の楽しみは年代の多様性。おそらくは 80 歳前後の大先輩から 20 歳前後の学生までが一堂に会するので集まりは壮観です。歓談の内容も多岐にわたり、まさに学校の歴史を実感するのです」と感想を寄せました。

作業後の交流会は毎年恒例の「寒ブリ大会」で幕を開けます。季節にはキャンパス産の「緑の恵み」を素材とした料理にも舌鼓を打ちます。春の「山菜天ぷらパーティ」では 30 種の食材が集まり、「こんな草や花が食べられるの」と学生が驚いていました。「自然薯パーティ」では学生と自然薯を掘り出すのに泥にまみれました。最近では学生主催のパーティも行われるようになりました。国立産の新鮮野菜を使った鍋料理に学生の心意気を感じました。

植樹会として一橋祭に参加してから7年目になりました。キャンパス内で採取した材料を使った「森のクラフト教室」にはたくさんの親子連れを中心に賑わい、一橋祭の「名物出展」になった感があります。訪れた国立の市民の方から寄稿文が寄せられました。「他ではなかなか味わえないことを知ることができました。一橋植樹会の森のクラフト教室を通じて、学生や OB が市民やその子供さん達と一体になっていたことです。枝やどんぐりなどの材料は目の前にある大学構内についてこの前まであったもの。それらで子供達が自分だけの一品を作る。そしてそれを見守る親御さんや大学生のお兄さんお姉さんが、時には助言したり手伝ったり。都市部では失われつつある世代を越えた人と人とのつながりがあります。そして自然に触れる体験までもがこの町のど真ん中で、なんのてらいもなく実現しているのです。一橋大学の懐の深さを感じる思いでした」

気持ちは一つ「母校は緑豊かに美しくあってほしい」、そして多様な活動。奥行き深い植樹会の歩みを誇りに思います。



一橋植樹会活動に思う



多数の人々に愛され、喜びと慰めそして勇気と清冽な緊張感を与えてくれる風景はそうありません。それだけに、そのようなものがあれば、その風景は非常に貴重です。一橋大学の国立キャンパスの風景はまさにそのような貴重品といえます。

東京商科大学が関東大震災の後に、神田一ツ橋を離れ、国立に移転したのは大英断、というよりも大冒険でした。とにかく近くに駅もなく、商店もなく、なにもないところに、皇居にほぼ面した、都心中の都心ともいえる一ツ橋から全学をあげて移ったのですから、これは大変です。

それだけに、新天地に開設されたキャンパスは素晴らしいものでなければならなかったに違いありません。国立に移転する長所があるとすると、それは地震の被害から逃れうることと神田一ツ橋ではとうてい無理な広大なキャンパスを擁してオックスフォード大学やケンブリッジ大学あるいはハーバード大学のような雰囲気醸し出すことだったはずで、移転先全体が大学街となり、大学のキャンパスもまた広いだけでなく、大学らしい雰囲気を醸し出せるものであってほしい。皆がそう切望していたのは間違いないと思います。

国立キャンパスの原型はその期待にしっかりと応えるものでした。重厚だけれども軽やかで明るい建物とその配置の鮮やかさは世界的にみても超一級品です。しかも、緑が各所で成長し、国立のキャンパスに独自の風景を生み出していきました。緑に囲まれた建物群のなかで、研究と教育が進められました。大学は知的で自由闊達でした。キャンパスでは緑すら知的でした。緑と建物と知性の調和は一橋に独自の風景を与えてくれたのです。

しかし、知性に磨きをかけねばならないように、緑もまた整える必要があります。そうしなければキャンパスは荒れてしまいます。いつとき、それに近い状態になったことがあります。この危機を救ってくれたのが一橋植樹会でした。緑を増やすだけでなく、的確に管理・保全するという思想のもとに、キャンパスの美化・緑化に努めてくれたのです。そのおかげで、一橋大学国立キャンパスの知的で美しい風景は、いっそう魅力的になりました。中心となって活動している本学 OB・OG だけでなく、教職員や学生も緑の適切な増加、管理と保全に参加しています。とりわけ学生諸君の積極的参加と活動ぶりは感動的です。これは、植樹会の活動の大きな成果の一つです。

われわれの先輩たちは国立キャンパスに深く大きな想いをかけました。一橋植樹会はこの想いを見事なまでに体現しています。一橋植樹会がこれからも一橋大学とともに成長し、発展するよう願ってやみません。

一橋大学長 山内 進

(9p より続く)

西暦		植 樹 会 関 連 ト ピ ッ ク ス	学内トピックス	学外トピックス
2009	平 21 5 月	植樹会集会所(施設課分室)新設(3 月) 第 36 回総会開催、会長に旗野友夫氏(昭 38 経)就任 運動部各部との連携・協働作業の推進強化	Global COE Hi-stat Newsletter 発刊	裁判員制度スタート
	6 月	キャンパス外研修 玉原高原(ブナ苗木植樹)、11 月には神宮外苑、 白金自然教育園見学実施	情報基盤センターを設置 国際化推進本部を設置	政権交代
	7 月	会員 1100 名を超す キャンパスツアー路の整備・ツアーの実施		
2010	平 22 3 月	第二草原ゾーンに着手		日本航空会社更生法申請
	5 月	第 37 回総会開催	国立移転 80 周年 兼松講堂レジデントオーケ ストラ誕生 山内進副学長が学長に任 命	中国 GDP 世界第 2 位 東日本大震災
	10 月	休日作業初回実施		
2011	平 23 5 月	第 38 回総会開催	「一橋大学プラン 135」発表	
	10 月	休日作業第二回実施		
	11 月	新生植樹会作業第 100 回実施		
2012	平 24 4 月	「寄付講義:緑の科学」開講		
	5 月	第 39 回総会開催、会長に八藤南洋氏(昭 40 経)就任	法科大学院司法試験合格 率 2 年連続全国第一位	衆議院総選挙 ねじれ解消
	9 月	会員 1300 名を超すとともに、年間作業参加者 1400 名弱に達す		
2013	平 25 3 月	「基本計画」レビュー現場検証終了	引き続き格付け AAA を取 得 一橋講堂が大学の手で運 営開始	富士山世界文化遺産に登 録
	5 月	第 40 回総会開催 一橋植樹会発足 40 年・新生植樹会 10 年記念式典開催		2020 東京五輪決定
	6 月	キャンパス外研修、町田市図師小野路訪問		
	10 月	雑木林再生のための植樹を始める		



緑の科学講義風景

歴代の植樹会会長、副会長 ならびに当時の一橋大学長、如水会理事長

	会 長	副 会 長	大 学 長	如 水 会 理 事 長
昭 48	本田弘敏	増田四郎	都留重人	竹村吉右衛門
49	"	"	"	高橋朝次郎
50	"	"	"	"
51	"	"	小泉 明	茂木啓三郎
52	"	"	"	"
53	"	"	夢沼謙一	"
54	"	"	"	"
55	"	"	"	川又克二
56	"	"	宮澤健一	"
57	竹村吉右衛門	"	"	"
58	"	増田四郎・水上達三	"	"
59	"	"	種瀬 茂	田部文一郎
60	水上達三	増田四郎	"	"
61	"	増田四郎・長谷川徳次	"	"
62	"	"	川井 健	"
63	"	"	"	鈴木永二
平 1	"	長谷川徳次	"	"
2	植松健悟	石川善次郎	塩野谷祐一	"
3	"	"	"	"
4	"	"	"	齋藤 裕
5	"	"	阿部謹也	"
6	"	"	"	"
7	"	"	"	"
8	"	"	"	伊藤助成
9	"	"	"	"
10	"	"	"	"
11	"	"	石 弘光	"
12	"	—	"	奥田 碩
13	"	—	"	"
14	"	—	"	"
15	"	—	"	"
16	岸田 登	田中政彦・寺西重郎	"	江頭邦雄
17	空 席	田中政彦(会長代行)・加納誠三	杉山武彦	"
18	加納誠三	國持重明・谷 和久・新里英雄	"	"
19	"	"	"	"
20	"	國持重明・谷 和久・土田将夫・ 八藤南洋・新里英雄・田崎宣義	"	高萩光紀
21	旗野友夫	鈴木 勲・八藤南洋・志田哲朗・ 佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	"	"
22	"	鈴木 勲・八藤南洋・湯川敏雄・ 佐藤征男・鐘江健一郎・田崎宣義	"	松本正義
23	"	八藤南洋・佐藤征男・湯川敏雄・ 鐘江健一郎・筒井泉雄	山内 進	"
24	八藤南洋	佐藤征男・湯川敏雄・筒井泉雄	"	"
25	"	佐藤征男・西村周一・湯川敏雄・ 筒井泉雄	"	"

(敬称略、会長名は年度総会時)
(背景写真は、国立移転後間もない頃撮影されたと思われる。)



編集委員会注：個別には注
釈を付していませんが、
本誌編集に際し、大半の資
料を「如水会々報」、「一橋
大学年譜」から引用、転載
しております。



Let's Green & Clean
一橋植樹会

<http://jfn.josuikai.net/circle/shokujukai/>

2014 年 4 月